

狭山市三曲連盟 創立30周年記念

定期演奏会を終えて～うらばなしその1～

狭山市三曲連盟会長 横山 美衣

創立30周年を迎えるにあたり、全ての集大成として、本来の三曲を聞いて頂こうという方向で会員の意見が一致した。では具体的にはどうするか、という段になって、なかなか新しいアイデアが出ない。いつも同じ人間の企画では、似たような舞台になってしまう。

そこで、お弟子の中から20代30代で、企画に加わっても良いよという希望者を募ったところ、5人が名乗りを上げた(もちろん先生が薦めて下さったのだろうが...)。最も若い正会員の川俣夜山氏を中心に、その5人で企画原案プロジェクトを立ち上げた。そこでは先生方に遠慮せず、各自の自由な発想で話し合っしてほしいということで、川俣氏以外の正会員は一切タッチしないことにした。この方法は、会員の若返りを図るにはどうしたら良いか...という難題からも導き出された方向だった。若者から出てきた企画の中核をなすものはこうだった。

『出来れば、社中の発表ではなく、全体テーマを決めて企画されたものにする』

他の三曲の団体では、ここ数年で漸く先生達が流派の枠を超えて一緒に演奏をするようになってきた邦楽の世界にあって、狭山市三曲連盟は、30年前からそのキャリアをもっている訳だが、その我々でも大きな挑戦となったのは、お弟子たちを、先生がらみではなく、社中の枠を超えて一緒に演奏させようということだった。



普通多くの先生は、弟子が自分以外の先生と接触することを好まない。

しかしそれをあえて自ら、弟子を複数の先生方で指導しようというのだから、何と開かれた、風通しの良い考えだろうと思う。しかし、何度も下合わせも複数の社中の調整をしなくてはならないし、先生方は、自分の弟子の面倒だけではなく、自分の受け持ちの曲の演奏者の面倒も見なくてはならないのだから、大変この上ない。

しかし結果は、思うより以上のものだった。先生も生徒も他のお社中に迷惑をかけてはいけないという緊張感で、非常に真剣に取り組んだ。また、関わっている社中の先生方は、解釈の違いなどがあると、責任者を中心に互いに尊重しあって話し合いをしながら進めていた。

全員がだたひとつ「より良い演奏にすること」そこに向かって真剣であったから、プライドが邪魔をすることは一切なかった。お弟子さん達も大変だったに違いないが、多くの先生の指導を受けられて、良い勉強になっただろうと思う。

(次号につづく)



市民会館大ホール(19年11月25日)